
真・恋姫†無双異聞～皇龍剣風譚・序章～

YTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双異聞〜皇龍剣風譚・序章〜

【Nコード】

N1857Q

【作者名】

YTA

【あらすじ】

日本、東京。。
三十一歳の北郷一刀は、変わり映えのしない、いつもの朝を迎えていた。

一刀は、何故愛する少女達を残して現代に帰還したのか。
その真意とは？

今、外史の命運を賭けた、北郷一刀と少女達の新たな戦いが始まる。

第零話 One more time / One more chance

この作品は、TINAMIで連載中の作品を再編集したものです。この『序章』では、主人公、北郷一刀が特撮風ヒーローとして活躍する事となる物語の経緯が語られます。

尚、ダグの魔人学園に関しては、主人公の設定の一部を参考にして
いるのみであり、キャラクター等は登場しませんので、あしからず
クロノトリガーからは、クロノトリガーと言うワードと時の最果て
の設定、及び、時の賢者ハッシュ（謎の老人）のみ登場します。

「ご主人様、起きて下さい」

北郷一刀の耳元で、優しい声が囁いた。

「今日は会議が重なって忙しいって言ったの、あんたじゃない！」

自信に満ちたもう一つの快活な声が怒った様にそう言うのを聞いて、一刀の意識は少しずつ覚醒して行く。

『ああ、そうだった』と、一刀は声に出さずにひとりごちた。

今日も一日、やらなければならない事は山の様にある。

早く起きなければ。

愛しい少女たちが自分を待っていてくれる筈はずなのだから……。

幸せなまどろみから目覚めると、いつもの天井があった。

照明と一体型の扇風機が何とも申し訳なさに、ノロノロと蒸し暑い空気をかき回している。

目下、労働条件の改善を求めてストライキを決行中のクーラーに見切りをつけて開け放っておいた窓からは、東京の朝の喧騒と排気ガスの臭いが大挙して押し寄せ、北郷一刀の部屋を蹂躪していた。

「う、ん」

一刀は、床よりは幾らかはマシ、という程度の寝心地のパイプベツトから起き上がると、サイドテーブルの定位置に置いておいたマールボロのパックから一本を抜き出して火を点け、深々と吸い込み、『ありがとう。月、詠』と、声には出さず、この世界には存在しない、愛おしい二人の少女に礼を言った。

十三年前ならば、恨みにすら思った、夢。

しかし今は、自分の全てを賭けて愛した人々の声を聞ける、唯一の時。

一刀は煙草を揉み消すと、すっかり汗で濡れてしまったTシャツを脱ぎながら、霧のかかったままの頭で考える。

皆の夢を見て、悲しみよりも喜びを覚えるようになったのは、いつ頃からだったろうか。

そう、十三年前のあの日から数えて、どれ程の時間が流れた頃だっただろうか、と。

弐

熱いシャワーが、一刀の意識を覚醒に導いていく。

こちらの世界に戻ってきてきて唯一の喜ぶべき点は、熱いシャワーと風呂を好きな時に好きなだけ使えると言う一時に尽きた。

最も、それとて、愛する人々と共にある幸せを天秤にかける程ではある筈も無い。

だが、今現在、自分が置かれている状況にささやかな幸福を見出

す位は、罪にはなるまい。

「あなたが、この外史を救うにたる力を得る事が出来たなら、その時は……」

必ず連れ戻す、と、あの筋肉ダルマは確かに言った。

時の最果てと呼ばれた、あの場所で。

「前に進むが良い」

不思議な老人は言った。

「刻クロノ・トリガーの引き金となりうる資格があったればこそ、お主は外史に引き寄せられたのだから。天より与えられたその器を磨かくのじゃ。おぬしの宿星、黄龍とは、その宿命を持つて因果を断つ星ぞ」と。

そうは言われても、“前に進む為”のけじめをつけるというのは、なまなかそう生半な事ではなかった。

寮の自室で目覚めてから暫らくの間の生活は、自分を取り巻く全てのものに彼女達の面影を見出そうとする自分との闘いだった。

ブティックのショーウィンドウを見ては、あれを贈ったら桃香は喜んでくれるだろうかとか、「世界の絶景」などと言う旅行番組を見ては、愛紗をあそこに連れて行ったらどんな顔をするだろうかなどと考え、コンビニエンスストアに並ぶ色とりどりの中華まんを見ては、鈴々や恋がそれを口いっぱい頬張る様を思い描いた。

その他にも、例を挙げれば暇が無い。

目に見えるあらゆる場所に、朱里が、雛里が、星が、翠が、蒲公英が、紫苑が、璃々が、桔梗が、焰耶が、月が、詠が、音々音が、白蓮が、袁家の連中が、魏や呉の少女たちが居た。

それでも、一刀の心が壊れずにすんだのは、“進まねばならない”と言う強迫観念じみた思いがあったからだ。

前に進んでさえいれば、いつか必ず彼女達の手を、白昼夢や幻ではない、あの暖かい手を握れる時がくるのだと信じた。

そう、願うのでも、望むのでもなく、ただひたすらに、信じたのだ。

参

進学先に防衛大学を選んだ訳は、幾つかあった。

一つは、考えうる限り、この国で最も戦いに近い場所にいる存在だったから。

それに加えて、一般の大学生などよりも遥かに多忙であろう事。

そして、家族やそれまでに得た友人と離れる口実が出来る事。

一つ目の動機は単純明快、学び、鍛える為。

二つ目の動機は、思い出に苛まれる時間と環境から逃れる為。

そして三つ目は、罪悪感からだった。

一刀にとって、家族や友人は捨て去った筈のものであった。

“あちらの世界”で生きて行くのだと決めた、その時から。

だから、痛かったのだ。

友人達の変わらぬ笑顔や、長期の休みで帰宅する度に見せる父の不器用な優しさや、母の手料理の味や、妹のはしゃぐ様子の全てが、痛くて堪らなかった。

本来ならば、真つ先にするべきだった鹿児島の祖父への剣術の師事を躊躇ったのも、その“痛み”によるところが大きい。

もう一度“あちらの世界”に帰るのだ、と言う思いは、“もう一度彼等を捨てる”と言う事実の裏返しなのだ。と気付いたとき、漠然と感じていた後ろめたさは、はつきりと形を持った罪悪感として、一刀の心を穿ったのである。

最も彼等にしてみれば、そんな一刀の思いなど与り知る事ではないから、進路希望の用紙に“第一志望・防衛大学”“第二志望・陸上自衛隊”と書いて提出した時には、ちよつとした騒動になった。さもあろう。ついこの間まで、なんの変哲も無かつた男子生徒の面構えが突然精悍になり、今まで興味のある様子さえ無かつた自衛官になるなどと言ひ出したのだから。

名探偵ならずとも、その裏に性質の悪いアジテーターの存在があるのを危惧するのは当然と言えた。

だからと言って、ある日突然、剣道部の顧問に食事に誘われて長々と民主主義について講釈を垂れられたり、友人達から冷やかし半分に『学年主任にお前の事を、根掘り葉掘り聞かれたけど、何やらかしたんだ？』などと、問い詰められても、筋金入りの鈍感で通つた一刀にはさつぱり理由が分からなかつた。

流石に、社会担当の教師に生徒指導室に呼び出され、『太平洋戦争における日本の行いについてどう思うか』と、至極真面目な顔で問われた段になって、成程と合点がいったのだが。

しかし、一体どうやって三者面談を乗り切つたのだろう。と、一刀は今でも考える事がある。

今となつてはまつたく覚えがなかつたが、恐らく、元来が放任主義である父母が、自分の意思を尊重してくれたのだろうが。

やむをえぬ事ではあつた。

本来であれば、高校生にとって一大事である筈なのだろうが、それに気持ちを割く余裕すら、当時の一刀にはなかつたのだから。

しかし、一度進むべき道を定めた一刀の行動は早かつた。

これも、曲がりなりに戦国乱世で一軍を率いてきた経験の賜物であろう。

一度意を決したら、迷つてはならない。

常に最大勢力であった魏や、三代にわたって築き上げた地盤を持つ呉であればいざ知らず、常に最小であり、拠るべき土地すら中々定まらず、将たちの知と武と団結、そして風評のみが武器だった蜀を率いていけば、陳腐な言い回しではあるが、迷いは身の破滅と同義だったのだから。

まず、剣道に打ち込んだ。

全国大会で上位に食い込めば、面接の時に有利になるだろうし、基礎体力の向上にもなるからだ。

続いて、勉強。

これは、単純に睡眠時間を削れば両立できた。

そもそも、全てが漢字で構成されていたあちらの文章を解読し、更には書かねばならなかった時の苦勞に比べれば、何ほどでもない様に感じられた。

ましてや、自分が出来ないからといって、人命だの国益だのが掛かる訳では無かったから、純粹に学ぶ事、知識を得る事の楽しさを知る事が出来たし、疲れがピークに達したところで泥の様に眠に落ちるので、夢を見る事も少なくなった。

悪友の及川祐などは、「お前、一体いつ寝てるんだ？」と、しきりに心配してくれたが、「疲れたときさ」答えてはぐらかした。

おかげで、三年生の時の全国大会では一位になり、成績も、学年で五位から下になる事はなかった。

まったく、人間、やろうと思えば大概の事は出来るものだ。

一刀は常々、後者は努力の成果にしる、前者はそんな綺麗事ではまさかあるまいと思っていた。

スポーツだろうと武術であろうと、自分の肉体が持つ限界を超えらるなどと言うことは、多寡《たか》だか一年おっつきの努力などでどうこう出来る事では無い。

他の選手と自分には、決定的な差があったのだ。

“ 剣で人を斬った事がある者と無い者 ” と言う、埋めようのない差が。

やがて、三年生になって部活を引退した後は、全てを受験に費やした。

おかげで、センター試験の時も受験本番でも、大して苦勞をした記憶はない。

試験だの面接だので生じる程度の緊張など、初陣の戦場に置いて来てしまったのだろう。

それだけが理由と言う訳でもないが、無事入学を果たしても、別段の感慨は覚えなかった。

ただ、不思議と居心地が良いと感じたのは意外だった。

何故なら不謹慎ではあるが、国防は元より、組織の中で成り上がろうと言う野心も、近代兵器への憧れもない一刀にとって、そこはただの通過点に過ぎない筈だったから。

多忙の中で、一刀は自分が持った不思議な感覚について考え続けたが、その理由が判明したのは、入寮して一年が過ぎた頃、いつものように食堂で昼食を取っていた時の事だった。

答えは、天啓の如く降って来た。

それは、匂いである。

この学び舎に染み付いた、汗の匂い。それは、野営の時に使う天幕や警備隊の隊舎を満たしていた、若い兵士達の匂いと、不思議に似ていたのだった。

現金なもので、そう思うと、ただの通過点だと思っていた場所にも愛着が沸いた。

そのくせ余分な事を考える暇もなかったから、在学中の四年の間、

一刀は戻って来てからこつち、限りなく“平穩”と呼ぶに近い状況を手にする事が出来たのだった。

少々、気が緩んでいたのかもしれない。

だから、悶々と考え込む事こそなかったものの、一日たりと忘れ
た事はなかった筈なのに、あんな悪夢を見てしまったのだろう。

四

それは、卒業を三ヶ月後に控えた、年末の夜の事だった。

一刀が、例によって何やかやと理由をつけて実家に帰らず、寮の
自室で珍しくぼんやりとTVを観ていた時の事である。

目ぼしい番組も粗方終わってしまった為、そろそろ寝ようかなど
と考えながら、それでもダラダラとチャンネルを弄んでいると、派
手な鳴り物に合わせて舞い踊る一人の男が画面に移り込んだ。

京劇だ、と気付くのにそう時間がかかった訳ではない。

何と無しに懐かしくなって、見惚れていたのだ。

戦いの間隙かんげきを縫う様な平時は勿論、三国同盟が成った後も、政務
の間に見に行つた芝居小屋で観ていたものの息吹、あるいは残滓ざんしを
感じたからだろうか。

間抜けな話だが、ご丁寧に字幕が題目を知らせてくれるまで、一
刀は意外と楽しんでいた。

“ 麦城における関羽最後の戦い ”

「くそ、年の瀬だつてのに縁起でもない……」

一人ごちてTVを消すと、今まで押さえ込んできた不安が、生暖かい泥の様に体に纏わりついた。

三国同盟が成つたのだから、麦城の戦いが起こる事などないし、そもそも正史であるこの世界の関羽と、外史であるあちらの世界の愛紗あいしやは、同一人物では無い。性別すら違うのだから。

しかし……。

『今あなたが居なくなったら、私たち王がどれだけ努力しても、三国同盟は間違いなく瓦解するわ』

いつか聞いた曹操こと、華琳かりんの声が頭をよぎる。

一刀はそれを振り払う様に頭から布団を被り、身じろぎすらせずに、眠りが訪れるのをひたすら待ち続け、何時しか、居心地の悪い眠りに就いた。

爛爛たる赫あかの中に、彼女は立っていた。

最後に過ぎた場所にあった、紅葉の葉が舞っているのだろうか。いや、違うだろう。

紅葉の赤は、これ程に禍々まがまがしくは無い筈だ。

第一、こんなに熱いはずが無い。

してみると、これはやはり炎だろう。

恐らく。

一刀がそう思い定めると、赫は明確に炎の形となって逆巻き始め、美しく老いた愛紗を照らし出した。

青龍偃月刀せいりゆうえんげつとうを振るい、舞う様に敵を蹴散らす勇姿は、共に戦場を駆けていたあの頃と少しも変わらない。

それにしても、この敵はなんなのだろう。

まるで影の様で掴み所が無く、かといって、影の様に薄っぺらに

は感じられない。

青龍偃月刀が奔る^{はし}たびに、幾つもの影が断末魔を上げて消えて行くのに、その数は一向に減る気配すら無いのはどう言う事なのだろう。

それからどれ程の間、魅入っていたのか。

青龍偃月刀は際限無く振られ続け、美しき軍神の舞は止まる事無く続いていた。

と、ふいに、ヒョヒョヒョヒョッ！！と言う音が遠くで聞こえた。化け物の笑い声にも思えるその音は一刀にもよく覚えがあった。

弓兵が一斉射を行った時の、弓弦^{ゆんづる}の嘶^{いなな}きだ。

空を覆いつくして迫りくる、死の群れ。

呆然とそれを見つめる一刀の横を、何かが凄まじい勢いで駆け抜けて行く。

「愛紗……！！」

瞬間、ふわりと立ち上った香りですれと分かった。

愛紗の控えめな、けれども優しい香りの香油。

美しい黒髪を靡かせ、軍神は死の群れに向かって疾駆した。

軍神の不敗の刃が、死の群れを切り裂いてゆく。

その一閃で叩き落としている矢は、十や二十では無い。

その証拠に、彼女の青龍偃月刀の切っ先の届かぬ場所は突き刺さった矢で埋め尽くされており、最早、鼠の這う隙間すら無い様な有様である。

それでも降り続ける矢の雨を、尚も払い、斬り、薙ぐ。

だが、いかな不敗の軍神とて、そんな事を永劫に続けられる筈は無い。

際限なく降り注ぐ死の群れの中の一匹が軍神の左腕の肉を引き裂くと、他のモノ達が緩やかな鎖骨に、滑らかな腹に、しなやかな脚に、我も我もとばかりに喰らい付く。

一刀は聞こえる筈の無い叫び声を上げながら、矢で出来た醜悪な草原を駆けた。

彼女を死の群れから救う為、もう一度、その腕に抱きしめる為に。しかし、矢の草原は余りに硬く、愛する人は余りに遠過ぎた。

とうとう、軍神の喉笛を、死の刃が貫いたのだ。

「愛紗！愛紗！愛紗！」

何度も名前を呼びながら、矢の草原を掻き分けてようやくたどり着くと、一刀は彼女を抱き上げた。

いや、抱き上げようとした。

だが、一刀の腕は、血に濡れた軍神の身体をすり抜けるばかりで、触れる事が出来ない。

「愛紗！愛紗！」

触れらぬのなら聞こえもしないかも知れないが、そんな事はどうでもいい。

今はただ、名を呼ぶ事しか出来ないからそうしているのだ。

いつの間にか、死の雨は止んでいた。

「愛紗？」

軍神の腕がゆっくりと上がり、喉に刺さった矢を掴む。

と、矢はいとも容易に二つに折れた。

ぜい、ぜい。

悲痛な音の呼吸をしながら、それでも軍神は首に刺さったままの矢尻に手を伸ばし、貫かれた方向に引き抜くと、ごろりと仰向けになった。

琥珀の色を湛えた瞳は、蒼く澄んだ空を見ている。

苦しげに息をする軍神の唇が動くのを、一刀は見た。

『ご主人様』と。

最早、声を出すことさえ叶わぬ口で、確かに、そう言った。

その横顔は既に年老いた軍神などではなく、一刀が愛した、美しい少女のそれだった

さて、今回のお話は、如何だったでしょうか？

この“序章”は、あと二・三作位は続くと思います。

中々タグに書いたヒーローになりませんが、ご容赦を。

因みに、当作品のサブタイは、曲名を元にしたたり、モジったりした
ものになります。

それぞれに、作品とリンクする様な楽曲を選んでいるつもりですの
で、興味のある方は、是非聴いてみて下さい。

感想、レビュー等お待ちしております！

あ、でも、私は打たれ弱い方ですので、出来るだけオブラートに包
んで頂ければ嬉しいなあ、なんて……（笑）。

では、また次回お会いしましょう。

第零話 One more time / One more chance P

今回は、一刀の二十代を早足で振り帰ります。

TINAMIでは、改ページを使って場面転換を行っていた頃の作品ですので、修正はしたものの、少し繋ぎが荒いですが、御容赦下さい。

卒業する時、防衛省に入る気は無いと告げたときは、流石に両親も随分と反対をした。

何せ、将来の幕僚への道を棒に振ると言うのだから、流石に放任だの尊重だのと言ってはいられないのも当然だろう。

せめて訳を言えと食い下がる両親に、まさか「そのうち別の世界に行くからご心配無く」とも言えず、腐心した末に「アメリカに行きたい」と答えた。

目的を問われたら「今は言えない」の一点張りで通した。

有体にいえば、『無理を通せば道理が引つ込む』形で、家族会議は閉会したのだった。

最も、一刀にしたところで、何の考えも無くアメリカ行きを選択した訳ではなかった。

技術は学んだのだから後は実践するのみ。

しかし、戦闘技術を実践するには、日本は平和過ぎたのである。だが、かの犯罪大国ならば、耳に挟んだバウンティハンター制度を利用できれば、その機会も遙かに豊富だろうと踏んだのだ。

加えて、英会話は防衛大のカリキュラムで習得していたし、在学時に毎月支給されていた11万円の学生手当と、年二回支給される35万円の期末手当が殆ど手付かずで残っていたから、当面の生活に窮する心配もなかった。

かくしてアメリカに渡った一刀が、銃で人を殺したのは一年が過ぎた頃である。

相手は、チンケな強盗の男だった。

数店のコンビニやスーパーのレジからそれぞれ500ドルにも満たない額の端金^{はし}をかつぱらった末に逮捕され、保釈保証業者に保釈金を立て替えてもらって保釈されたものの、踏み倒して雲隠れ、と言う、絵に描いた様な保釈金踏倒し逃亡犯である。

双方にとって運の悪い事に、一刀と相棒^{バディ}がヤサに踏み込んだ時、そいつは混ざり物が ドツサリ入った極めて質の悪いコークで、バツトトリップの真つ最中だった。

しかも、ナイフや拳銃ならまだしも、SPAS12アサルトショットガンなどと言うデカブツを振り回しているのだから、最早、はた迷惑を通り越して、歩く厄災と言っている。

元来が極至近距離用兵器であり、室内戦で威力を發揮する散弾銃を乱射されては、いかな米国海兵隊退役軍人と防衛大出身の俊英とて、手心を加えてやる余裕は無かったのだ。

変わり果てたジャンキーの死体を呆然と見つめる一刀を見た相棒^{バディ}は、シヨックを受けていると思っただろう。

「お前は悪くない」とか「仕方なかったんだよ」などと言ってしきりに慰めてくれた。

彼の心遣いは素直にありがたかったが、一刀が呆けてしまった訳は、そんな事では無かった。

そもそも、人を殺めるのは初めてではない。

「軽い」

そう思ってしまったのだ。

以前、剣で人を斬り殺したときは、その感触と刃にかかった重み

に鳥肌が立った。それは、自分が目の前にいる人間の命を奪ったのだという、証だったから。

しばらくの間は、夢にも見た。しかし、今回は違う。銃の引き金は、人の命の重量にしては軽過ぎた。

多分こんな事を、剣や槍、弓で、多くの人間同士が殺し合う戦場を知らない現代の戦人いくひつじんである兵士達は、実感として感じる事など無いのだろうと思うと尚の事、空虚な感情が一刀を包んだ。

“あちらの世界”では、戦争や犯罪に止まらず、流行り風邪や中耳炎などの、現代では考えられない様な簡単な事で人が死んだ。そう言う意味では、今より遙かに命が軽い時代だった事は間違いない。しかし、軽くはなくなつた筈の命を簡単に奪う術をもまた、この世界には数えきれない程あるのだと、身を以て実感してしまい、それが一刀を、妙に虚しくさせたのだった。

そんな事があつてから、二年の月日が過ぎた頃、一刀がアメリカでの生活にも大分慣れ初めた一刀が、日本に帰国する事になったのは、全くの偶然からだった。

弐

「 国に帰れや、ベイビーフェイス」

警察署内の飾り気の無い喫煙所でそう言ったのは、兼ねてから懇意にしていた警部補だった。

ベイビーフェイスとは童顔と言う意味で、西洋人からすると総じて実年齢より幼く見える東洋人によく付けられる渾名あだなである。

その例に漏れず、この警部補は一刀の事を、初対面の時から一貫してベイビーフェイスと呼び続けている。

「なあ、ベイビー、俺はイタリア系だから、あいつらの事は良く知ってる。お前がこの国にいる限り、あいつらはお前を狙い続けるぞ」

警部補の言う“あいつら”とは、一刀がある事件に関連して係わりを持ったマフィア達の事である。

彼等は、一刀の事を余程疎ましく思っている様で、僅か二ヶ月の間に命を狙われること、既に五度に及んでいたのだった。

「あいつらがお前を狙うのは、お前に目の前をウロチヨロされるのが鬱陶しいからだ。今ならまだ、お前が居なくなりさえすりゃ、あいつらも引き下がるだろう」

警部補は、くたびれたキャメルのパツクから一本を振り出し、一刀にパツクを投げて寄こしてから、手垢で黒ずんだジツポでお互いの煙草に火を点けると、疲れた様な口調で言葉を続けた。

「だがな、こんな事が続いて、その内あいつらの身内の誰かを殺つちまったりした日にゃ、世界中のどこに逃げたって一緒だぜ」
「そうかな、やっぱり」

一刀は、警部補が勧めてくれたキャメルの火を見つめながら、疲れた様に尋ねた。

「ああ、お前が殺されるか、お前がファミリーの一族郎党を皆殺しにするまでは、終わらねえだろうさ」

「ん……。じゃあやっぱり、ここらが潮時かな」

この会話から数日の後、一刀のアメリカでの生活は終わりを告げたのだった。

参

帰国してすぐ、一刀は祖父の所へ向かった。自分自身、『今更ど

の面下げて』と思わなくてもなかったが、正直なところ、もう他に、行くべき場所が思いつかなかったのだ。

「そいば、振ってみろ」

祖父は、数年振りに訪ねて来るや、藪から棒に自分を鍛え直して欲しいと懇願する孫に、顎で木刀を指しながら、それだけ言った。一刀は祖父に正対し、柞ゆずという木から作られた木刀を握ると、深く息を吸って呼吸を整えた。

『一の太刀を疑わず、雲耀の速さで打ち下ろせ』幼い頃から教え込まれたその言葉を胸に、一刀は渾身の力を持って木刀を打ち下ろした。残心を切ると、祖父は目を閉じたまま、「ここに座れ」と、自分の前の床を顎で差し示した。

一刀が、その指示通りに祖父に正対して正座すると、次の瞬間、懐かしい祖父の匂いが一刀を包み込んだ。

「一刀。お前、なんをやっちゃったとよ？」

祖父の声が、震えていた。

「優しくったお前が、そげな殺気ば込めて剣ば打ち込める様になるまで、一人でなんをやっちゃったと？」

祖父は、一刀の抱え込んでいるものを、その一太刀から垣間見たのだから。だから、泣いてくれたのだ。そう悟った瞬間、一刀の中で張り詰めていたものが、プツリと音を立てて切れた。

「ごめんな、じいちゃん。俺、何にも言えないんだ」

自分でも、声が裏返るのが止められない。

「俺、もつと強くならなきゃいけないんだ、俺に出来るのはそれだけだから。だからじいちゃん、俺を強くしてくれよ」

「分かった、もう、なんも心配せんでよか。じいちゃんが教えられ

るこつは、みんなお前に教えちやる」

祖父は、子供の様に泣きじゃくる一刀の頭を抱きしめると、耳元で力強く囁いた。

それからの五年間は、ただひたすら剣を振る毎日だった。祖父は、“瓶の水を移すが如く”と言う古い言い回しの通りに一刀を鍛え、その持てる全てを与えたのである。

四

「おいがお前に教えられるこつは、もうなんもなか。そいだけのこつじゃ」

免許皆伝を言い渡されて驚く一刀に、祖父は笑ってそう言った。

「じゃがの、そいは、お前が学ばねばならんこつがのうなったちゅうのと、同じではなかぞ。あとは、お前が自分で道ば作るしかなかつちゅうこつじゃ」

そう言うと、祖父はもう一度豪快に笑った。

「今生の別れになるのじゃろ？」

見送りはいい、と言う一刀の言葉をのりくりりとかわしながら、結局空港まで来てくれた祖父は、静かな声で一刀に問うた。

「うん……、多分。いや、きっとそうなると思う」

誤魔化したところで、どうせこの人には嘘は通じない。

「一刀、男の別れじゃ。じいちゃん、湿っばいこつは言わん。ただの……」

祖父の眼が、真っ直ぐに一刀を見据える。子供の頃から、この世

界で一番強くて、一番怖くて、一番優しいと信じていた人の眼。
絶対に忘れる事の無い様に、一刀はその眼を見返した。

「お前は、じいちゃんの誇りじゃ、どげん時も、前ば見て進め」

「うん、ありがとう。じいちゃん」

祖父は、一刀の乗った飛行機が蒼穹の果てに消えるのを、何時までも見守り続けていた。

第零話

One more time / One more chance P

さて、今回のお話、如何でしたか？

少し短いですが、次回、次々回と、この作品オリジナルの世界観を説明する話になり、かなり込み入って来るので、バランスとしてはちょうど良いかと思えます。

レビュー、感想など、お待ちしております。

では、また次回、お会いしましょう！

幕間 星の一秒 前編（前書き）

今回と次回のお話で、なぜ一刀が外史を去り、十数年の間、己を鍛え続ける事になったのか？

その真相が、過去に遡って明かされます。

では、どうぞ！

追記

尚、感想にて、現在の状況が解りづらいとのご指摘をいただきましたので、少し解説をさせていただきます。

この幕間も含め、『序章』の物語は全て、第零話冒頭のシーンでの、一刀の回想によって構築されております。つまり、

現在 空白の十三年間のダイジェスト（第零話） 原因となる出来事（幕間） 現在（次回からの本編）と言う流れになっています。

では、どうぞ！

「大事な話があるから一緒に来てえん」

踊る筋肉ダルマが一刀にそんな事を言ったのは、三国の主従が勢ぞろいして紅葉狩りに訪れた山の麓だった。

孫策こと雪蓮と一刀の提案で、“三国の親睦を計る為の外交行事”と言う名目の元、色付いた山々の景色を肴に酒宴をしようと言う事になったからである。

「貂蝉。貴様、そんな事を言っつて、ご主人様によからぬ真似をする気ではあるまいな？」

貂蝉の言葉を聞くや否や、傍に侍つて護衛を務めていた愛紗が、すかさず食つてかかった。

まあ、何処からどう見ても完全無欠の変態半裸マッチョが、愛する男を一人で連れ出そうとしているのだから、気色ばむのも無理はあるまい。

しかし、そこは相手もさるもの。

「あらん、嫌だわ愛紗ちゃんたら人聞きの悪い どおゝこかの誰かさんじゃあるまいしい、適当な理由でご主人様を連れ出して食べちゃう様な事、する訳なくいじゃない？」

貂蝉はそう言っつて意味ありげに微笑むと、虎でも卒倒しそうなウインクを愛紗に投げた。

「貴様、何を訳の分からん事……を……」

更に言い募ろうとした愛紗の顔が蒼白になったかと思うと、瞬く間に真っ赤になる。

「なあ　　!?!」

愛紗は、貂蝉の言わんとする事を悟って、言葉を失った。

主に初めて寵愛を賜ったあの日、愛紗は確かに、軍事演習で負った主の傷の手当てを口実にして、自分の想いを主に伝える為の時間を作っただのだ。

まあ、『食べちゃったのではなく食べられちゃっただ』、と反論出来なくもないが、主に想いを受け入れて頂けた場合、どう言う話の流れになるかまでを考えてあんな人気の無い場所に誘っただから、“適当な理由で連れ出して食べちゃった”と言われればぐうの音も出ない。

しかし、何故この筋肉ダルマがまだ出会ってすらいなかった頃のそんな話を知っているのだ？

ポンポン。

混乱して固まったまま、取り留めの無い思考を何とか纏め上げようとする愛紗の肩を、大きな手が優しく叩いた。

「ハッ!!ご主人様？」

一刀は愛紗の肩に手を置いたまま、もう一方の手で何かを指し示した。

その指の先に目をやった愛紗が見たものは、こちらに向かって誇らしげに親指を立てて片目を瞑っている、常山の昇り龍こと趙子龍その人であった。

「せ、せ、せ、星いいい〜!!」

怒りに任せて星に突撃しようとする愛紗を、肩に置かれた一刀の手がやんわりと引き止めた。

「ご主人様、お止めにならないで下さい！あの不埒者ふいぢものは、一度こっぴどく懲らしめねば分かんのです！」

「いや、何度懲らしめても同じだと思うよ。だって、星だぜ？」

「うう、それはそうかも知れませんが……」

「まったく、困っちゃうよなあ」

一刀は、いまだ怒り覚めやらぬ愛紗を宥めるように微笑む。

「~~~~~！！」

『まただ』と、愛紗は思った。

主にこの笑顔を向けられる度、心の臓が高鳴って、自分を思い悩ます全ての事が、嘘の様に溶けて身体の外に流れて行ってしまふ。

「まあ、ご主人様が咎めるなど仰るのであれば、是非ありません

……」

どれ程肌を重ねても、どれ程甘い睦言を交わしても、それが変わらないと言う事実は、愛紗にとってささやかな、しかし何ものにも代え難い喜びだった。

「うん、そうしてあげて。それに、折角みんな揃って遊びにきてるんだし。滅多にある事じゃないんだから、楽しまないかね？」

「ふふっ、そうですね」

「じゃ、愛紗も行っておいで。俺も、貂蝉の話を聞いたらすぐに行くからな」

「はい、そうさせて頂きます。では、後程……」

「愛紗ちゃんてば、オトメねえ」

愛紗が包拳ほうけんの礼をして颯爽と歩み去ると、貂蝉がホウとため息をつきながら呟いた。

「お前なあ、そう思うんならあんまりからかってやるなよ。可哀想だろ」

「あらん そう言うご主人様だつて、愛紗ちゃんの照れてるお顔を
見るのは、だあい好きでしょ。」
「まあ、否定はしないけどさ……。で、どこに行くんだ、貂蝉？」
「あら、愛紗ちゃんがあんまり可愛くて、忘れるところだったわ
じゃ、ついてきて、ご主人様」
一刀は、クネクネと踊りながら歩き出した貂蝉の後を追って、森
の奥へと入って行くのだった。

弐

もう、どれくらい歩いたろうか。

貂蝉は相変わらずクネクネと踊りながら、汗ひとつかかずに道なき道を軽快に進んで行く。

「なあ、貂蝉。一体、何処まで連れて行く気なんだ？」
後に続く一刀は、肩で息をしながら訊ねた。

初めは、人に聞かれたくない為に場所を変えるのかと思っていたが、これだけの距離を歩くからには何処か目的地があるに違いない。
「ああら、ご主人様だったら、もうへばっちゃったのう？もうちよつとだから頑張つてん」

「もうちよつとつてお前なあ……。て、うわあ！！」
貂蝉が急に立ち止まった為に彼女（？）にぶつかりそうになった
一刀は、両足に渾身の力を込めて踏み止まった。

あの逞しい背中に顔を埋める位なら、一年間つきつ切りで袁紹と麗羽の世話をしるでも言われた方が、まだマシである。

「貂蝉、いきなり止まるなよ！危ないじゃないか！」

「着いたわよ、ご主人様」

思わず貂蟬の背中に抱きつく自分を想像し、青ざめながら大声を出す一刃に対して、彼女（？）は静かに言った。

「え？」

一刃は、視界を遮っていた貂蟬の巨躯の横に並ぶと、目に入った光景に呆然とした。

“光”がある。

森の中の、緩やかに開けた空き地にあるモノを言い表すには、そうとしか答えられない。

夜空の星が、そのまま目の前に落ちてきたかの様だ。

しかも“それ”は星と同じ様に大きく、小さく、確かに瞬いている。

「な、んだよ、これ……」

夜空に輝く星々が、遙か宇宙の彼方にある惑星の光であると言う事を知らないこの時代の人間が見れば、本当に星が落ちてきたと思うに違いない。

「驚くのはちょっと早いわよ、ご主人さ・ま」

「え、ええっ!?!」

無意識に“光”に向かって近づいていた一刃は背中に衝撃を感じてつんのめった。

『ぶつかる!?!』

そう思った瞬間、世界は白で埋め尽くされた。

「う、あ、れ？」

気がつくのと、一刀は右足を前に出して踏ん張った滑稽な姿勢のまま、見知らぬ場所に立っていた。

「ええ、と……」

とりあえず、周囲を見渡してみる。

「何じゃあ、こりゃあ……」

一刀は、幅五メートル程の石畳で出来た棧橋の様な場所に立っていた。

“棧橋の様な”と言うのは、それが川に架かっているのでも、道の上に架かっているのでもなく、ただ黒い空間にポツンとあるだけだから、本当に橋の役割を果たしているのか分からない為に、建造物としての形状から判断するしかないからだ。

橋の手すり部分には等間隔で街灯が立っており、その先には緩やかな階段が続いている。

全体の意匠は、明らかに大陸のものでは無い。

一刀は、反射的に後ろを振り向いた。

来た道を引き返そうとしたのである。

しかし。

「!?!?」

そこには、一面の黒が広がっていた。

「一体、どうなってんだよ、これ……」

一刀は、一面の黒い空間を呆然と見詰めながらひとりごちた。

“これ”は、暗闇と言うには清廉過ぎるし、虚無と言うには豊か過ぎる。

上手くは言えないが、そんな気がした。

「気をつけてね、ご主人様」

一刀が振り向くと、いつの間にか、階段に続く橋の上に貂蟬の姿があった。

「落ちたら、“帰って”来れなくなっちゃうわよ」

「貂蟬。お前、さつきは絶対そこに居なかったよな？」

「あらん 細かい事は気にしちゃだめよお？」

「いや、全然細かくないだろ……。てか、俺をここに連れて来たのはお前なんだろ、貂蟬？」

「ええ、そうよん」

貂蟬は、一刀の疑問にあっさり答える。

「一体、何処だよここは……」

最早、驚き過ぎて怒る気にもなれず、一刀はげんなりした様子で貂蟬を見た。

「ここはね、“時の最果て”と言われてる場所よ」

貂蟬は、どこか物悲しそうにそう言って、黒い空間に目を遣った。

「時の……、最果て？ええと。取りあえず場所の名前だけから想像するに、まさか、ここは異空間的な所だったりする？」

「ええ、急いでだから、ちょっと乱暴にしちゃったけど、ごめんしてねん」

貂蟬はいつもの調子を取り戻すと、ウインクを投げて言った。

「貂蟬、お前、一体……」

「だあい丈夫！すぐに“思い出す”から。それよりも、早く行きましょー！」

貂蟬はそう言うてにっこりと微笑むと、親指を立てて橋の先にある階段を指し示した。

階段を上り切ると、石畳が敷かれた、出来た広場の様な場所に着いた。と言つても、精々二十五メートル四方程で、おまけに柵に囲まれているのだから、どちらかと言えば“庭”とか“極めて小さな公園”とでも呼んだ方が、しっくり来る気がする。

その中央には、煌々と辺りを照らす背の高い街灯が設置されており、街灯の下では、何故かソフト帽にスーツ姿の老人が、ステッキに寄りかかりながら、うつらうつらと船をこいていた。

「遅かったな、ご主人様よ」

一刀が、何処かの映画のワンシーンからそっくり切り取ってきた様なその光景に呆然としてみると、すぐ横からやたらどダンディな声が聞こえた。

「卑弥呼!？」

そこに居たのは、柵に寄りかかって腕を組んでいる貂蟬の相方、卑弥呼であった。

長く伸ばした白髪を左右で分けてサイドで瓢箪型に結び、口には立派なガイゼル髭を蓄えている。

髪型と公家の様な眉は大まけにまけるにしても、首から下がまともであれば、さぞやはこの場所に映えただろうロマンスグレイであるのに、その格好たるや言葉にするのも恐ろしい、極小のサイズの白ビキニにやたら襟の大きなスーツだけと言う、凶悪極まりないものであった。

その絵面、既に前衛芸術も真つ青のシニールっぷりである。

「お前も、俺に話とやらがあるのか？」

「左様。しかし、まだ“始まって”おらぬようだ。まあ、話はそれからでもよかるう」

「だから、何だっ言うんだ、さつきか……ら!？」

一刀が、卑弥呼の要領を得ない答えに意見しようとする、突然

世界がグラリと歪んだ。

「あ、うとうあー!!!」

酷い宿酔いにも似た感覚はほんの一瞬。

それは、あつと言う間に頭が破裂しそうな凄まじい激痛となって
脳髓を駆け巡り、一刀は堪らず地面に膝を着いて絶叫した。

様々なヴィジョンが、頭の中に浮かんで、いや、“湧いて”来る。
銅で出来た鏡、冷たい目をした美しい少年、愛紗、鈴々と共に黄
巾党に立ち向かっている自分。そこには、桃香の姿は無い。

「うう、こ、れは……はああ……!!!?」

「ふむ、始まったか」

のた打ち回る一刀を見下ろしながら、卑弥呼が呟く。

貂蝉は祈る様に指を組み、心配そうな眼でのたうち回る一刀を見
詰めていた。

風、凜、星 。 華琳、春蘭、秋蘭 。 大きな月の照らす

丘、肩を震わせる、後ろ姿の華琳。

「はあ！うあおお！」

雪蓮、祭さん、冥琳 。 真っ青な顔に壮絶な気迫を溢れさせ
て兵を鼓舞する雪蓮。腕の中で、静かに微笑みながら冷たくなって
いく冥琳。

沢山の子供達に囲まれている自分……。

「記……おく？俺の ……!?!」

どれ程の間、そうして居たのだろう。

意識を取り戻した一刀の眼の前には、皺だらけの手に握られた力
ツブがあった。

「水じゃよ」

優しいしゃがれ声がそう言うと、カップを口に近づけてくれる。

一刀は、無我夢中でその手にしがみつき、喉を鳴らして中身を飲み干した。

「落ち着いたかね？」

「うん、ありがとう……」

そう言いながら見上げると、そこには先程見かけた老人の顔があった。

深い皺が刻まれた額、ソフト帽から見えるモミアゲと口髭は光沢のある銀、丸眼鏡の奥の瞳は、優しい光を湛えている。

「あの、あなたは？」

「まだ無理はせん方が良い。あれだけ多くの多元世界との“記憶の統合”があつたのじゃ、相当の負荷が掛かった筈だからのう」

老人は、一刀の背中を優しく撫でさすりながら言った。

「“記憶の統合”？じゃあ、あれはやっぱり、俺の、記憶……？」「左様」

今まで黙って事の成り行きを見守っていた卑弥呼が口を開く。

「今なら私達が何者で、何で、こんな所にご主人様を連れてくる事が出来たのか、分かるわよね」

貂蝉の問いかけに、一刀は眉間を揉みながら頷いた。

「ああ、剪定者、肯定者。 。 “思い出した”よ」

「でも、何でこんな、“記憶の統合”なんてことが？」

「それはな、此処が“時の最果て”だからじゃよ」

漢女二人に向けられた質問に、老人が代わりにそう答えた。

「え？」

「ここは、あらゆる時間の行き着く場所であり交錯点でもある。だから、多元世界に生きる、或いは生きたお前さんとの存在の境界が曖昧になって、多元世界のお前さんの記憶が、一遍に流れ込んでしまったのさ。最も、一方的なものだがね」

「つまり。俺は、此処に来た事によって、本来は受信出来る筈のない“同型機”の電波まで受信出来る様になった電話機みたいなもの、って事かな？」

一刀は、少しずつはつきりとしてきた頭で、戸惑いながら考えを口にしてみると、老人は柔らかく微笑んだ。

「ふむ、百点満点とはいかんが、及第点じゃのう。まあ、間違つてはおらぬから、捉え方としてはそれで良いぞ。最も、本来はこんな事が起きる事は極めて稀なんじゃがな」

「それって、俺みたいに、“記憶の統合”が起きるケースが、凄く珍しいって事？」

「そうじゃ。まあ、此処は時間の流れの外にある“時の最果て”だから、『何年に何回の割合で何人だ』と、統計を出してやる訳にもいかぬがな、少なくとも、ワシが此処に居ついでから見たことがあるのは、精々両手の指で事足りる程度の数じゃな」

老人は近くに積んであった木箱の上に腰を下ろすと、講義の続きを始めた。

「よいか、この時の最果てと呼ばれる場所から繋がっておるのは本来、“現実に”存在する可能性のある時間だけなのじゃ。解るかの

「？」

「えつと、つまり、俺や貂蝉達が、正史って呼んでる世界の歴史上で“分岐する可能性のあった時間”、て事？」

老人は、上手く問題を解いた生徒を褒める教師の様な顔で微笑みながら頷く。

「左様。本来の電話と同じように巨大な“正史”と言う電波塔がそれぞれの電話機から発信された電波、つまり、多元世界の同一人物の記憶を一手に引き受け、然るべき周波数に変えて管理してあるから、正史の世界のどこぞの某が此処なにかしに迷い込んだとしても、存在の境界が曖昧になる様なことはまず無い。その存在自体が、一時“時間の流れ”から外れる、つまり、圏外の状態になるだけなのじゃよ。じゃが、外史は違う。何故だか解るかね？」

段々一刀への講義に興が乗ってきたのか、老人の口調は、敢えて一刀自身に答えを考えさせる様なものになってきた事に、一刀は気付いた。

「うんと、外史って言うのは、違法にコピーした携帯電話とかと同じで、本来ある筈の無い物だから？」

「良いぞ、少年！」

老人はボンと膝を叩くと、嬉しそうに『カツ、カツ、カツ』と笑って、講義に戻る。

「中々に良い線をいっておるぞ。お前さんの言う通りじゃ。外史とは、正史に於ける人々の想像によって“作られる”世界。つまり、偽物フェイクと言うよりは、様々にカスタムされた劣化版複製品デットコピーなんじゃな。そこへ、“オリジナル”のICカードであるお前さんが差し込まれた事で、外史を空想した人々は正史の電波塔を使わずに、その外史の電波を受信出来る状態になり、“観測者”として外史と係わる様になった。しかし、お前さんのオリジナルが差し込まれたは外史は、一度は終端を迎えておる。それは、記憶の統合で理解しておるうっ？」

一刀は、複雑な顔をして頷く。

「うん、覚えてるよ。その終わり方も色々みたいだけど……」

「そこはまで言及すると話がややこしくなるから、此処では取り合えずは脇に置いておけ、良いな？」

「うん、了解」

「よし、では続きじゃ」

老人は、咳払いを一つして、話を続ける。

「お前さんのオリジナルが差し込まれた外史は終端を迎えた。しかし、“観測者”達は、お前さんを差し込んだ模造品は、まだまだ拡張性があると考えたのじゃな。例えば、最初の模造品には取り付けていなかったが、あっても“不思議ではない”パーツを付けて見たらどうだろう。或いは、基本性能はそのままに、違った方向性でマイナーチェンジをしてみてもどうか、とな」

「それが、桃香や雛里達の存在。それに、もし俺が最初に出会ったのが華琳や雪蓮だったら、と言う出来事ってことか」

「少年、お前さんは本当にスジが良いな。わしも教え甲斐があるわい」

老人は、何処からか取り出したタンブラーを口に運んで喉を湿らせて言った。

「あ、良い匂い……」

一刀は、老人のタンブラーから漂ってきた懐かしい香りに、思わず鼻をひくつかせてしまう。

「ほっほっ。そうか、お前さん、珈琲の匂いを嗅ぐのは久しぶりじやろう。飲むかね？」

「良いんですか!？」

「構わんよ。ほれ」

「一刀は、老人が何処からか出してくれたもう一つのタンブラーに入った暖かい液体を、まずは眼に、次に鼻に、そして舌に、ゆっくりと味あわせた。」

「そして、二度とこんな美味しい珈琲を飲む事は無いだろう、と心底思ったのだった。」

伍

「さて、と、話を続けても良いかの？」

「一刀が、ひと心地つくのを待っていてくれた様子の老人に礼を言うと、老人は黙って頷いて講義を再開した。」

「そう、で、観測者達がどうしたかと言うとじゃな、外史に差し込まれる直前のお前さんから今度はお前さん自身、つまり、ICカードのコピーを作って、自分達で作った幾つかのコピーした携帯電話に同時に差し込んだ、とまあこんなところかの。然るに、お前さんは確かに正史に生を受けた人間であるのと同時に、外史に生まれた人間に限りなく近い存在、という事じゃな。じゃから、電波塔の管理外の場所を飛びかっただけのお前さんのコピーの中で、最も強い電波を放つもの同士の周波数と共鳴してしまったのじゃよ」

「うん、良く解ったよ。でも、やっぱりいい気はしないな。自分がコピーって言われるのは……」

「一刀は珈琲を啜りながら、複雑な顔をして俯いた。」

「少年、何か勘違いをしとりゃあせんかね？」

見かねたのか、それとも本当に、単に誤った認識を正そうとしているのか、老人は再び話始めた。

「良いか、お前さんはあくまでも、オリジナルと同等のスペックを持つておる。それは既に、オリジナルと何ら変わらんという事じゃ。区別がつかんのだから、当たり前前事よ。それに、それぞれの外史のお前さんを、それぞれに愛している外史の住人達や“観測者”達がおる。それは、不幸な事かね？」

「あ　　！」

「どう考えるかは、お前さん次第じゃが、それは忘れるなよ？」

老人は、弾かれた様に顔を上げた一刀見つめて、そう言った。

「では、ご主人様が記憶の統合について理解したところで、此処に来てもらった理由を話すぞ」

今まで、説明を老人に任せて沈黙を守っていた卑弥呼が、おもむろに口を開いた。

「ご主人様、心して聞くのだ。ご主人様のいた外史は　　、間もなく滅ぶ」

「は！？何言ってるんだよ、卑弥呼。まさか、剪定者が！？」

「いいえ、違うわん。まあ、ある意味ではそうなんだけど、直接的な原因では無いわねん。順序立てて話すから、まずは聞いて？」

驚愕してうろたえる一刀を窺める様に、貂蝉が言った。

「でも……。うん、分かった」

貂蝉は、小さく頷いた一刀に微笑むと、改めて口を開いた。

「ありがと　あのね、ご主人様の今居る、桃香ちゃんや愛紗ちゃん、鈴々ちゃん達と一緒に戦った外史は、ご主人様達の物語を締め括る為の、基盤として選ばれたの」

「それってさっき言ってた、俺がコピーされてからの物語の、っ

て事？」

「そうよん。勘違いしないで欲しいんだけど、これは、ご主人様達が消えるって事じゃ無いのよ？物語の終端。つまり、一旦“観測を終わらせる”為の舞台としては、一番調整がしやすかったから」

「ああ、確かに。華琳や雪蓮達と出会った外史では、先に逝ってしまった人たちもいたし、俺だって……」

「一刀は、統合された膨大な記憶の中から、その情景を思い浮かべて顔を歪める。」

胸が張り裂けんばかりに苦しいのは、今や、彼女達を失った時の痛みもまた“統合”されているからだろう。

「ええ。だから、誰一人欠けずにみんなが仲良く暮らしている世界である三国同盟が成立した“この”外史が選ばれたのよん。私達は色々準備して、終端を静かに見守るつもりだった」

「え、ちよつと待って！」

「あら、なあに？」

「今言った、“色々な準備”って、一体何したのさ？」

「一刀が思い浮かんだ疑問を口にする、卑弥呼が答える。」

「何、大した事ではない。今、ご主人様に起きた事を、物語に矛盾の出ない範囲でやっただけだ」

「俺に起きた事って、“記憶の統合”を！？」

「左様。それぞれの外史に思い入れのある“観測者”の為に。最も、突貫作業だったので少々綻びが出てしまったのだが」

「卑弥呼は、申し訳なさそうにポリポリと頬を掻く。」

「その仕草は、首から下が……（以下略）」

「ああ。その為に二人は、都に来て俺達に接触したんだね？」

「わお 今日のご主人様だったら冴えてるわねん。記憶が統合したからかしら？」

「そうかもね……。でも、いくらなんでも、そんな事可能なの？」

「余り舐めてもらっては困るぞ、ご主人様よ。我ら肯定者は、外史

の肯定に必要と判断したならば、大概の事は出来る。その証拠に、統合前のご主人様の記憶にも、魏や呉の将達との思い出があった筈だ」

「ああ！確かに言われてみれば！でも、全然気付かなかつたよ」

「うふん それがアタシ達の腕の見・せ・ど・こ・ろって事かしらん」

「じゃあ、俺の外史が滅ぶって言うのは？」

一刀は、腰をくねらせながら胸を張る貂蝉を蹴り倒したい衝動を抑え込みながら尋ねた。

「おお、本題からずれるところであつたな。で、儂と貂蝉は、終端までゆつくりとこの外史を見守る気でいたのだが、何度かあつた五胡との小競り合いの時、凄まじい悪寒を感じてな。密かに軍の後をつけて調査しておつたのだ。そこで見つけたのが……、貂蝉！」

卑弥呼に呼ばれた貂蝉が、一刀が来たのとは反対の通路から巨大なズタ袋を担いで来た。

大きさだけなら、自身と同じ程もあるそれを、一刀の前にドサリと置くと、「ちよつとキツイから、覚悟してね、ご主人様」と言つて袋を剥ぎ取り、その中身を露わにした。

その瞬間、一刀の身体は凍りついた。

『化け物』とは、こう言うモノを言うに違いない。

猪と猿の合いの児の様な顔に澱んだ目。一見、骨格は人間と同じに見えるが、腕は膝まで伸びており、背骨は前傾しているし、足の大きさは優に四十cmはあるだろう。

そして、その手足の先には、まるで猛禽類の様な巨大な爪が付い

ている。

しかも、一刀がどんな戦場でも嗅いだ事の無い様な、凄まじい臭気をはなっていた。

「何なんだ、コレは……」

一刀は、余りの臭いにヒリヒリと痛み出した目で、卑弥呼と貂蟬を見て言った。

「うむ。これは、『バク』と言うモノだ」

卑弥呼は瞬き一つせずに平然と、しかし吐き捨てる様に、その怪物の名を口にした。

「バクって、あの夢を食べる『獾』の事？でも、これは……」

「違いわ、ご主人様。罵倒の“罵”に苦痛の“苦”で、『罵苦』よ。最も、“夢を食べる”って言うのは、あながち間違いないけどね」

「どう言う事だよ？」

「コレはねん、元々は剪定者達が、効率良く外史を剪定する為に作り出したものなの。さっき言った、“ある意味”って言うのは、そういうことよ。最も、これを送り込んだのは彼等じゃないんだけど」

「成る程、外史を喰っちまうって事は、人間の夢を喰うのも同じ、って事か……」

「正鵠だな。どうれ、フンツ！！」

卑弥呼は、罵苦と呼ばれた怪物の脚を右手に握るや、気合一閃、“柵”の外に放り投げた。

「すまなんだな、ご主人様よ。本来、彼奴等は活動を停止して暫くすれば泥となって消え去るのだが、一目実物を観てもらいたくてな。我が術で形を留めて置いたのだが、まさか、あそこまで臭いおるとは思わなんだ」

「不法投棄にならないのかよ、アレ……」

未だにいつ謀反を起こしてもおかしくない胃を何とか宥めながら、
一刀は罵苦の消えて行った方を見遣って言った。

「なあに、術が解ければすぐに消えるわ。心配はいらぬ。しかし、
これで儂等の言う事を信じてもらえよう？」

卑弥呼はそう言って、試す様に一刀を見た。

「信じるって、あいつらが世界を滅ぼすって事を？」

「左様」

「でも、さっき言ってたよな？作ったのは“剪定者”だけど、罵苦
を送り込んだのは奴らじゃないって。じゃあ、誰がそんな事を？」

「知れた事だ。“罵苦たち自身”よ」

卑弥呼は、静かな声で唸る様にそう言った。

幕間 星の一秒 後編(前書き)

今回のお話で、この『皇龍剣風譚・序章』は完結となり、次回からは本編として、再始動致します。

では、どうぞー！

き

今回は、ちゃんと時間を上げるわ。

そう言ったのは、貂蟬だった。

「みんなに訳を話して、お別れを言いなさい。でないで、下手したら帰ってくる前に内輪揉めで滅んじゃうかも知れないんだから」

『そう、華琳も同じ様な事を言っていたっけ……』

一刀は、上手く働いてくれない頭で取り留めも無く考えながら、仲間達が居る筈の場所に向って歩いていった。

太陽の位置は、貂蟬に連れられて森に入った時と殆ど変わっていない。

それは、あの場所の存在とそこで語られた事が事実なのだを念を押している様で、一刀をどうにもいたたまれない気持ちにさせた。

そうこうして山道を歩いている内に、一刀はいつの間にか、森の入り口近くまで帰って来ていた。

まだ少し遠い山の麓から、仲間達の笑い合う声が聞こえる。

『みんなが、笑ってる』

一刀は目を閉じ、鼓膜に全神経を集中して、その愛おしい音に耳をすませた。

心の中に、光が灯る。

『何やってんだよ、北郷一刀！今まで散々守ってもらったろう。今度は俺の番、ただそれだけの事じゃないか！』

一刀は自分で自分の頬を張ると、力強く歩き出した。

弐

運の良いことに、三国の王達は円座になって杯を交わしていた。

「あ、ご主人様！こっちに来て一緒に話しようよ！」

一刀の姿を見つけた、劉備こと桃香が、豊かな胸を弾ませながら、ブンブンと手を振る。その顔は、ほんのりと赤い。

「やあ、それじゃあ、お邪魔するかな」

一刀は、精一杯の微笑みを浮かべながら、王達の酒宴に加わる為に、少し間隔が広がった蓮華と桃香の間に腰を下ろした。

すると、座って早々、隣に座っていた孫権こと蓮華が一刀の腕に絡みにつき、拗ねた様な眼で顔を覗き込んできた。

「聞いてくれ、一刀！桃香の奴が、酔った私が姉様にそっくりだと言うのだ！そもそも、まだ酔う程に呑んでもいないというのに！」

誤算である。まさか、もう出来上がっているとは。

「ええと……」

一刀が、向かいに並んで座っている桃香と曹操こと華琳に目線で助けを求めると、桃香は『ほら、やっぱりそっくりでしょ』とでも言うようにこちらにウインクを返して微笑むばかり。

華琳はといえば、顔を斜め下に向けて口を握り拳で押さえ、クツクツと細い喉を鳴らしている。

恐らく、後々、蓮華をこの時の話でからかって愉しむ為に、あえて泳がせておく気に違いない。

魏の霸王、恐るべし。

さて、補給線は断たれ、あまつさえ援軍も期待出来ぬとあつては、孤軍奮闘し、勇と智謀を以ってこの虎を退治ねばならぬ。でないといつまで経っても大事な話が出来そうに無い。

一刀は腹を決めると、一歩間違えば諸刃の刃になりかねない、危険な策を実行に移した。

「どうしたんだ、蓮華。今日は随分と甘えん坊だなあ」

一刀は、閨の中で睦言を囁く時の飛びつきりの甘い声で囁きながら、蓮華の頭を優しく撫でてやる。

「だって桃香が……。私は、姉様の様な手のつけられない吞兵衛ではないわ　、ヒック！」

「うんうん、蓮華は普段が真面目だから、たまに酔っ払ったとき位は雪蓮みたいになったって良いんだよ」

声色は変えず、頭を撫でていた手を背中から廻して顎の下を撫でてやると、蓮華はくすぐったそうに首を竦めながらも、トロンとした眼をして一刀に身体を預けてきた。

一刀は、『やっぱり姉妹だな、こう言う時の顔は小蓮にそっくりだ』などと思しながら、チラリと向かいに視線を走らせると、案の定、桃香が頬を栗鼠の様に膨らませてこちらをジツトリした眼で睨んでいる。

一方の華琳はと言うと、可憐な唇を三日月に美しく歪めて、悠然と微笑んでいた。恐らく、一刀の浅はかな計略などお見通しなのだろう。

だが、それで良い。桃香も蓮華も酔ってしまった以上、まともな話を聞いて段取りをつけてくれそうなのは、華琳しかいないのだから。

一刀は意を決すると、最後の一押しを決行する事にした。

「まったく、今日の蓮華は本当に可愛いなあ。思わずこんな事しなくなっちゃうよ」

そう言って、蓮華の顔にゆっくりと自分の顔を近づけて行く
と、

「ちよ〜と待ったあ!!!」

おおっと、ここでちよつと待ったであ〜(古ッ)!!!

「ご主人様を独り占めしちゃだめ〜!!!」

桃香はスライディング気味に一刀と蓮華の間に割って入ると、両手を広げて“通せんぼ”をする様に蓮華と対峙する。

「なっ!? 何かにつけて『ご主人様はみんなのもの』などと言っておきながら!!!」

『おお、二人の背中に炎が見える……。ごめんな二人とも』

一刀は、心の中で謝りながら、相打つ龍虎の如く睨み合う二人の傍をそつと離れて、華琳の横に席を移した。

「酷い男ね。虎を使って龍(劉)を煽るなんて」

一刀は華琳の洒落に気付いて、バツが悪そうに苦笑した。

「よく言うよ。目が合ったって黙って見てただけのくせに……」

「だってあの蓮華、とっても可愛いのも。愛でていたくもなる

と言つものでしょう？それに、あなたなら、あの位どうとでも出来ると思つてね？」

「へいへい、どうせ俺は種馬ですよ」

「あら、そこまでは言っていないわよ」

「いや、絶対言つてたね、心の中で」

「分かる？」

「散々言われ続けてるからな」

一刀は、さも気分を害したように頼杖をついて見せた。しかし実のところ、一刀は華琳とのこんなやり取りが嫌いではない。

何だか、油断のならない相棒同士にでもなつた様な、不思議な緊張感が心地良いのだ。

最も、そんな事を口にしようものなら、華琳の側近達からの罵詈雑言と鉄拳制裁の嵐を一身に受けそうな気がするので、決して口には出さないが。

「で、何の用なのかしら？」

華琳は、そんな一刀の心情を見透かしているのか、気にも留めずに言った。

「分かる？」

一刀が、先程の華琳と同じ問いを返すと、華琳は不敵に笑つてみせる。

「分かるわよ。他の誘いを全部断つて一直線に此処に来た上に、二人をあんな風にあしらうなんて、貴方らしくないもの」

やいのやいのと口喧嘩を続ける桃香と蓮華を、優しげに見詰めながらそう言った。

「三国会議を開きたいんだ。それも、出来るだけ早く」
「……そう、分かつたわ。では、今夜にしましょう」

「え！？折角みんなで遊びに来てるんだし、別に今日じゃなくても
。それに、酔っ払ってる子だっているし」

一刀は、華琳の間髪入れぬ答えに逆に面食らって、慌てて言った。
「あれを御覧なさい」

華琳は小さく溜め息をつく、顎で遠く山向こうの空を指し示した。

「あ、雨雲……」

華琳の示した空には、荒々しくうねりをあげる黒雲が、少しずつ広がり出そうとしているのが見てとれた。

「まあ、この季節ですもの。あまつさえ、山の近くに居れば、こう言う事もあるでしょう。此処から都までは精々一刻（約二時間）。みんなお風呂の準備もしているだろうから酔い覚ましにはちょうど良いし、簡単な食事を済ませてから城に集まるにしても、日が沈むまでには十分間に合うわ。どうせ急ぐなら、早いに越したことはないのでしょう？」

「ありがとう、華琳」

一刀は礼を言いながら、『俺と桃香、なんでこんな鋭い人に勝っちゃったんだらう』と、心底思ったのだった。

「やっぱり。何だか、朝から嫌な予感がしていたのよね」

暫らくして、小さな霸王は、撤収の呼びかけに言った一刀の背中を見ながら、そうひとりごちた。

参

同日、夕刻、都、北郷居城

。

玉座の間には、三国の王と、その頭脳たる軍師達が一同に会していた。

窓からは、折りしも降り出した秋雨が屋根と大地を打つ音が、僅かに洩れ聴こえている。

「うわあ、本当に降って来た。華琳さんの言う通り、早めに帰ってきて正解だったね、蓮華さん」

桃香が、向かいに座った蓮華に話し掛けた。その頬は未だ赤いが、それは酒のせいではなく、湯上りである為だろう。

対する蓮華は、両肘を机につき、その掌で顔を覆ったまま「ああ……」と気の無い返事を返した。

「あ、もしかして、さっきの事、まだ怒ってる？ごめんね、私、酔っ払ってて」

申し訳なさそうに頭を下げる桃香に蓮華は首を横に振って答えた。

「違うんだ、桃香。それを言ったらお互い様だろう。私が気にしているのは、よりもよって華琳の前で、あの様な痴態を晒してしまった事だ……」

「ああ。それは、ねえ……」

桃香は同情する様に、苦笑いを浮かべながら溜め息をついて頷く。あれはそもそも、華琳が思いのほか酌上手だったのが原因だった。

普段は滅多に口にしない様な冗談を言いながら、空いた杯を次々と満たしていく華琳の手練手管に乗せられ、あつと言う間に酩酊してしまっただ。

普段から“明日の○ヨ” ばりのノーガード戦法が売りの桃香はともかく、堅いガードの上からの緻密な試合運びを身上とする蓮華は、この意外な奇策に成す術もなく敗れ去ってしまったのである。

「せめて、一眠りさせてくれれば」

忘れられたかもしれないのに、という言葉は飲み込む。若い女の恥辱に歪む顔を見るの事が至福の悦びと公言して憚らない魏の霸王が、それを許してくれる程に寛容だとは、どうしても思えなかったらだ。

「蓮華様は、体質的にはお父上に似られておいでなのですから、御酒を過ぎされるのは上策とは言えません。まあ、これも授業料と思つて、次回からの戒めになさる事ですね」

呉の柱石と謳われる、周瑜こと冥琳の手厳しい言葉に素直に頷く蓮華を見て、陸遜こと穩と、呂蒙こと亞莎、蜀の擁する臥龍・鳳雛と讃えられる二人の軍師、諸葛亮こと朱里と、鳳統こと雛里が揃つて笑みを漏らした。

「ふん、笑つていられるのも今の内だぞ」

蓮華は、カマボコのような眼で三人を見て言った。

「穩と亞莎は酒が強いから兎も角、朱里と雛里はもう少し育ったら、いつ私と同じ目に遭わされた挙句に華琳の毒牙にかかってもおかしくは」

「失礼ね、私にそんなモノは付いてはいないわよ」

蓮華が負け惜しみの脅し文句で二人を怖がらせていると、桂花、風、稟の三軍師を従えた悠然とした足取りで入室し、定位置の席に腰を下ろしながら言った。

「それに、許しも無く他人の臣下に手を出したりするものですか。最も、一刀や桃香が『良い』と言ってくれるのであれば、喜んで閨にご招待するけれど？」

華琳はそう言つて怪しく微笑み、桃香と小さな軍師二人にウインクを投げた。

「はわわ」

「あわわ」

華琳の言葉、と言うよりも、後ろに控える桂花と稟の魚のオーラに気圧されて、桃香の後ろに隠れる朱里と雛里の様子に苦笑しながら、冥琳が助け舟を出す。

「それにしても、北郷は遅いな。自ら臨時の三国会議を開きたいなどと言っておきながら……」

「そう、ね」

華琳は、虚空に眼をやって相槌を打った。

『出来れば、ずっと来なければいいのに』

華琳はそんな事を思いながら、密かに玉座の間の奥に続く扉を見遣ったのだった。

「ごめん、ごめん。考えを纏めるのに時間がかかっちゃって」

北郷一刀が、そんな言い訳をしながら玉座の間に入って来たのは、先刻の会話から数分程経った頃の事である。

「まったく。どうせまた、そこいらの侍女にちよっかいでも出してたんでしょー!？」

「一刀殿、……不潔です!」

桂花と稟の相変わらずの口撃に苦笑しながら、一刀は自分の席についた。

「桂花も稟も機嫌が悪いなあ。折角の紅葉狩りを早くに切り上げちゃったのは申し訳ないけどさ……」

「気にしなくて良いわ、一刀。この二人が拗ねてるのはあなたのためではないから。それより、三国会議を開かねばならない程の重要な話とやらを聞かせてくれないかしら?」

華琳の言葉に頷いた一刀が、姿勢を正して口を開いた。

「うん。その前にまず聞いて欲しいんだけど、これから俺がする話は、かなり突拍子の無い事だ。でも、決して俺の気が触れた訳でも、ましてや、性質の悪い作り話なんかでもない」

その言葉を聞いた王と軍師達は、一斉に居住まいを正した。いつもの一刀のものとは違う、重苦しい声と切羽詰った雰囲気は、この場の空気を引き締めるのには十分過ぎる程のものだったのである。

一刀は、全てを話した。正史と呼ばれる自分が来た世界の事。外史と呼ばれるこの世界と正史との関係。

剪定者と肯定者の存在。貂蟬と卑弥呼が、その肯定者である事。そして、罵苦と呼ばれる“外史を喰らう”存在によって、この世界が滅びの危機に瀕している事。

その危機を救える可能性があるのは、”正史から遣って来た存在”である一刀しか居ない、という事を。

話し疲れて息を吐き、すっかり冷めてしまった茶を啜る一刀に対して、最初に質問を投げ掛けたのは、やはり華琳だった。

「一刀、あなたの話の正史や外史、肯定者や剪定者、それに罵苦とやらの話は、取り合えず信じるとしましょう」

「「！！！？」」

全員の驚きの視線が、華琳に集まった。その場にいた誰もが、一刀の話を『馬鹿馬鹿しい』と言って真つ先に否定するのは、華琳だろうと思っていたからである。

「華琳、あなた、自分が何を言っているか分かっているの！？一刀の話信じらるなら、私達は、何処の誰とも知れない人間達に“作られた”存在である事になるのだぞ！？」

「解っているわよ、蓮華。だから落ち着きなさい。取り乱したところで、何がどうなるものでなし」

華琳は、語気を荒げて反論する蓮華を手で制しながら、言葉を続ける。

「良いかしら。人などと言うものは、その殆どが、必ず“作為的に作られる”ものよ。解る？」

華琳の言葉を聞いて、冥琳が頷く。

「成る程。確かに人は、男と女の“子供が欲しい”と言う想いと行為を得て初めて、この世に産まれる訳だからな。それを“作為的”と言う事は、あながち間違っではない、か」

華琳は、優雅に頷いて話を続けた。

「そうよ。私が“殆ど”と言ったのは、勿論、例外もある事を含んでいるからだけれど。でも、冥琳が言った通り、この世に生を受け人間の“殆ど”は、その両親に“望まれて”産まれてくると言う事。そして、かくあれかと言う“願い”を込めて、『真名』を与えられる。つまり、私達に私達らしくあつて欲しい、と言うね」

今まで事の成り行きを見守っていた桃香が、頷きながら言った。

「そっか……。私達には、お父さんやお母さんの他にも、そう言う“願い”を持つてくれる人が沢山いる、ってことなんですわ！」

「まあ、好意的過ぎる気もするけれど、あなたらしくて良いわね。それに比べて蓮華、あなたは否定的に考えすぎよ。……それに、今、最も考えなくてはならないのは“そこにある危機”についてではなくて？」

「むう、それは、そうだな」

蓮華が納得したのを見届けると、華琳は改めて一刀の方に向き直り、先程の質問の続きを始めた。

「で、その、“罵苦”だったかしら？その連中が五胡を……、まあ、取り込んだのか手を組んだのかは解らないけれど、一緒になって攻めてくるとしましょう。でも、いくら相手が化物でも、三国が協力している今、戦力的にそうそう引けをとると思えないわ。やつらが“外史を喰らう”と言う事が、それとどう関係してくると言うの

？」

「一刀は、卑弥呼から聞いた罵苦の性質を、出来るだけ丁寧に伝えようと腐心しながら、口を開いた。

「つまりね。この世界、“外史”の人達は、多かれ少なかれ、正史の人々の想いを受けて存在してるんだって。まあ、“想いで出来た世界”で生きてるんだから当然なんだけど。で、罵苦は外史を喰らう。それは、“人の想いを喰らう”って事と同義なんだよ」

「一刀はそこで、まるで末期まじこの酒でも呷あおる様に、残っていた茶を一口に飲み干した。

「相手が“低級種”って言う、所謂いわゆる“一兵卒”であれば、みんな位人々の“想いの力”を強く受けている英傑なら、問題無いらしい。何故なら“低級種”は、対象を“殺す”事しか、想いの力を摂取する事が出来ないから。卑弥呼が言うには、『乳呑み児に肉を食わせる様なもの』なんだって。つまり、殺す事で一旦“離乳食”にしないと、消化出来ないんだ。だから、殺されない限り、問題無い。そんなに強い訳でもないって話だし。まあ、卑弥呼の基準だから、当てになるかは分からないけど」

「一刀は、わざとおどけた口調でそう言うと、少しだけ微笑んだ一同の顔を見渡して、再び口を開いた。

「でも、“中級種”と“上級種”、“超級種”はそうじゃない。外史の生き物に近づくだけで、その生き物に注がれている想いの力を吸収する事が出来るから」

「それって、傍に近寄るだけで死んでしまっただけですか!？」

「亞莎の問いに一刀は頷いた。」

「死ぬって言うよりも、“消える”って言った方が正しいかもね。最も、『中級種』の“吸収”の力はそこまで強力じゃないから、名のある武将なら一瞬で消えちゃう様な事はないらしいよ。上手くすれば、勝てるかもしれないって。その代わり、心身共にかかり消耗

する事になるらしいけど。でも、『上級種』と『超級種』は、蜀の五虎将、恋、春蘭、雪蓮、思春辺りでも、十中八九は近づくと意識を失うだろうって言った」

「あわわ。それじゃ、軍略も戦略も立てようがないです……」

雛里が唇を噛んで、悔しそうに俯いて言った。

「でも、そんな怪物に『ご主人様なら勝てるかも知れない』って、どう言う事？ご主人様がこの世界の人じゃないから、“吸収”されないって言うのは分かるけど……」

最もな疑問を口にしたのは、桃香だった。確かに、正史から遣つて来た一刀が“吸収”による影響を受けないのは分かる。

しかし、“吸収”の能力如何に係わらず、存在そのものが『怪物』である罵苦に、身体能力では蓮華にも遠く及ばない一刀が太刀打ち出来る道理は無い。

それは、一刀自身も分かっている筈だ。

「うん。だからね、みんな」

一刀は深く息を吸うと、己の決意を口にした。

「俺は、自分の世界に戻ろうと思うんだ」

四

“空気が凍る”と言う言葉は、こう言う時に使うのだろう。最早、沈黙と言う言葉すら生ぬるい程の静けさが、玉座の間を覆い尽くし

ていた。

そんな中で第一声を放つたのは、意外な人物であった。

「ふざけるんじゃないわよ、この全身精液男！散々好き勝手やった拳句に、危なくなつたからってトンズラするって言うの？見損なつたわ！！」

曹魏の誇る筆頭軍師、荀？こと桂花が、一刀に対して罵詈雑言を浴びせかけるのは今に始まつた事ではない。しかし、今の桂花の声には、信頼する者に裏切られたと言う哀しみが潜んでいる事を、その場にいる誰もが感じていた。

「違うんだ、桂花」

「何がどう違うって言うのよ！！」

「ごめん、言葉が足りなかつたな。でも俺は、“戻る”とは言ったけど“帰る”とは、一言も言つて無いぞ？」

いきり立つ桂花を両手で制しながら、一刀は言った。

「はあ！？」

「では、どう言う事なのです？今のお兄さんの言葉だけでは、桂花ちゃんじゃなくても、恨み事の一つも言いたくなくなってしまつてすよ〜」

あんぐりと口を開けて驚いている桂花に変わって、程？こと風が、ブスツと一刀を睨んで言う。

「うん、ごめんな。いきなりの事だったから、俺も上手く話せなくて……」

一刀は一同の顔を見てそう言うと、再び話を始めた。

「卑弥呼が言うには、俺みたいに外史に“落とされる”人間は、適当に決まつてる訳じゃないんだって。先天的に、ある“資質”を持っているらしいんだ」

「それはもしや、文字通りの“天の遣い”の資質、と言う事ですか

？例えば、超常の力を使役できる、と言う様な……」

郭嘉こと稟がそう言うと、一刀は大きく頷いた。

「そうだね、それはかなり近いと思うよ。『黄龍の器』って、卑弥呼は言つてたけど。その資質を持つ人間は、膨大な氣を操る事が出来て、本来なら外史に“落とされる前に”ある程度その才能を開花させているか、“落とされた後”に才能を開花させる様な出来事の出逢う宿命にあるらしいんだ。でも、俺にはそれが無かった。いや、俺の運命が、“必要としなかった”って言った方が良いかな」。

「確かに、桃香様は兎も角、愛紗さんや鈴々ちゃんがずっと傍い居たら、そんな必然性はありませんからね……」

「朱里ちゃん、サラツと酷いよお。自覚あるけど」

朱里が、軽く握った手を顎の先の先に添えながらそう言うと、桃香が『ヨヨヨ』と泣き崩れた。

それを機に、場の空気が軽くなったのを感じた一刀は、心の中で桃香に礼を言つて、話を元に戻した。

「そう。知略の面でも、かなり早い段階から、臥龍鳳雛の両先生の助けがあつたしね。だから、“乱世を鎮める為にやって来た天の遣い”の俺じゃ、当然、罵苦には勝てない」

「分かつたぞ。北郷は、一度、天に還つて、然る後に“怪物の侵略から世界を救う天の遣い”として再臨しよう、と言うのだな？」

ポン、と手を叩いてそう言った冥琳に、一刀は微笑みながら頷いた。

「つまり我々の国、いや、世界を救うには、一刀が天に戻る事が必要不可欠、と言う訳だな？」

蓮華が、寂しげに一刀を見つめて言うと、今まで沈黙を守っていた華琳がおもむろに口を開き、サラリと、一刀が最も恐れていた質問をした。

いや。正確に言えば、この場に居る全ての人間が恐れている質問を、であるう。

「で、帰って来れる確率とその期日は？」

「まず、帰って来れる確率。これは、俺にも分からない。卑弥呼は、『器が成ったら』と言ってたけど、つまりは俺の研鑽次第って事だと思う。だから、最大限の努力をするつもりだ」

「正確な解答ではないけれど……。つまらない嘘で誤魔化さなかったのは上出来ね。良いでしょう。で、帰って来れると仮定して、期日の方は？」

「それは貂蟬が、正史と外史の時間の経過を“極力縮めて”くれるって言ってたから、本格的な罵苦の侵攻までには間に合う筈だ」

一刀と華琳の視線は、どれ程の間ぶつかり合っていただろうか。

「うん、分かった。私、ご主人様を信じるよ！」

「桃香、あなた」

場違いな程のその明るい声に、華琳は毒気を抜かれた様に桃香を見遣る。

「だって、ご主人様は、約束は必ず守ってくれるもん。『大陸を平和にする』って言う私との約束だって、守ってくれた。だから、『みんなですつと一緒にいる』って言う約束だって、きつと守ってくれるよ！」

桃香の根拠など何も無い。しかし、確信と呼べるほどの自信に溢れた言葉に、蓮華が笑って頷いた。

「そうだな。“ずっと一緒にいる為の場所を護る為”の、一時の別れ。そう思えば、辛い事など何も無い。必ずまた遭えると、解っているのだから」

「蓮華、あなたまで。いいえ、そうね。この曹孟徳ともあるう者が、真名も、この肌すら許した男の言を信じなかったとあって

は、名折れも良いところだわ」

華琳のその溜息混じりの言葉を契機にして、その場に居る者達が異口同音に、『一刀を信じる』と言ってくれた。

「ありがとう」

一刀には、最早それ以外に思いつく言葉はなかった。

その後、軍師陣を中心に、今後の対策の概要が次々と決められていった。

罵苦との戦闘になった時の対応、一刀の不在をどの段階で民に知らしめるのか。

大方の議案が纏まった頃には、既に空は白み始めていた。

「一刀」

散会となり、自室に帰ろうと廊下に出た一刀を呼び止めたのは、華琳だった。

「華琳、どうしたの？」

「どうした、と言われれば、さっきまでの全てがどうかしているわよ」

「まあ、そうだよなあ。で、本当になんの用なんだ？」

あまりにも“らしい”、のほほんとした一刀の反応に、華琳は溜め息をついて言葉を続けた。

「今日の午後に行く臨時の全体軍議で、予定通り、この三国会議での事を各国の重臣達に話すけれど、その時に仔細しじゆを聞く子達は勿論、さっきの会議に出ていた子達だって、不安になるでしょうから

「

「きちんとみんなと話せて事？」

「ええ」

「分かった。誠心誠意、話してみるよ。華琳の所にも、必ず行くから」

「ばっ！！私の所に来いなんて、一言も言っていないじゃないの！」

「俺が、行きたいんだよ」

「ふん、好きになさい。じゃあ」

一刀はもう少し頬を赤らめ、踵を返して歩き去る華琳の背中が見えなくなるまで、頭を下げ続けた。

そしてその日の午後、予定通りに開かれた臨時全体軍議は、予想通りに、荒れに荒れた。呆然と立ち尽くす者、人目を憚らず泣き出す者、涙を流しながら怒鳴り散らす者……。

反応こそ様々だったが、全員が一刀と離れる事を哀しんでくれた。一刀には、それが何より有難く、何より辛かった。

各国の王と軍師達が騒ぎを鎮めてくれるまで、一刀は一言も喋らず、ただ、自分を愛してくれているが故の少女達の嘆きの声を、その身に浴び続けたのだった。

「では」

ようやく場が静まると、冥琳が厳かに喋り出した。

「これより、我ら三国の代表である北郷一刀殿より、御言葉を賜る。尚、先刻申し渡した通り、この後、北郷殿はしばしの間天の国へとお戻りになられる。故に、これより賜る御言葉が、北郷殿がお帰りになるまでは、三国全体に対する最後の上意となろう事を、各自、くれぐれも肝に銘じる様に。それでは、北郷殿」

「一刀は冥琳の言葉に誘われ、席を立て、集まった重臣達に向かって重い口を開いた。」

「みんな、こんな大事な事を一方的に告げる形になってしまって、本当にすまない。でも、俺達がずっと一緒にいる為には、俺達が託されてきたものを護る為には、この別れはどうしても必要な

事なんだ……。俺は、必ず帰って来る！だから、みんな。みんなも死なないでくれ。勝とうなんて、考えなくてもいい。負ける事無く俺が帰って来るまで生きて、一人でも多くの民を護って、待っていて欲しい。これが、俺からの頼みだ」

それだけを言うと、一刀は、深々と頭を下げた。

静まり返った玉座の間に、北風が吹き込んだ。季節はじき、冬になろうとしていた。

それから暫らくの日々にあつた少女達との別れの物語は、今ここで話すべきではあるまい。いずれ、その時が来たら語る事になるだろう。

物語とは、そう言うものだ。

六

「うおおお!!?」

時の最果て。無限の静寂が支配する筈のこの空間に場違いな叫び声が響くのと同時に、何も無い空中に北郷一刀の身体が忽然と現れ、派手な音を立てて石畳に落ちた。

「うう、気持ち悪いし痛いし……」

「別れは済んだのか、ご主人様よ」

卑弥呼は結んでいた“印”を解くと、一刀を見下ろして尋ねた。
「うん。やれるだけの事はね」

一刀は“パンパン”と、尻に付いた埃を払うと、卑弥呼に言った。
「で、これからどうすれば良いんだ？」

“前”に進むのじゃよ」

卑弥呼に代わって、老人が答える。

「刻の引き金クロノトリガーとなりうる資格があつたればこそ、お主は外史に引き寄せられたのだから。天より与えられたその器を磨かくのじゃ。おぬしの宿星、黄龍とは、その宿命を持って因果を断つ星ぞ」

老人はそう言つて、ステッキの先で道を示した。

一刀は頭を下げて謝意を表すと、もう何も言わずに街灯が照らす薄暗い道を歩いて往った。

「また、戻つて来れるだろうか」

一刀が去つた後、卑弥呼は老人に尋ねた。

「来るともさ。例えどれ程の偉人であろうと、はたまた凡人であろうと、所詮人の一生など、この星の歩んでいる久遠の刻の流れの中にあつては、等しくほんの一秒の瞬きに過ぎん。しかし時として、その瞬きの中で産まれた“想い”の力が、久遠の刻の流れすらも変えうる事もある。わしはそれを、直じかに見てきた。あの北郷と言う若者の眼は、かつて想いの力で世界を救つてみせてくれた少年とよう似ておる」

「。ならば、ワシも往くとしよう。ご主人様の力足りえる“幻想”を探しにな!!」

卑弥呼はそう言つと、一飛びで柵の向こうへと姿を消した。
残された老人は、再び浅い眠りに落ちる。

いつかまた、刻の齒車が回り出すその時まで

「お前が送つてくれるのか、貂蝉？」

道の先にあつた小さな空き地には、貂蟬が立っていた。

「もちろんよお アタシがすっかりちゃっかり、ご主人様をもと居た場所に送つてあげちゃうんだからあ」

「そつか。なあ、貂蟬」

バチン、と力強いウインクを飛ばす貂蟬に、一刀は静かに言った。
「なあに？」

「俺、頑張るよ。だから、必ず迎えに来てくれよな？」

「勿論よん。あなたがこの外史を救うにたる力を得る事が出来たら、その時は、必ずアタシが迎えに行くわん。だから、決して運命を動かす“きつかけ”を見逃さないでね？」

貂蟬はそう言つて一刀に答えると、渾身の力で浮かんでいた光を押し広げた。

「うん、分かつてるよ」

光が、広がっていく。

一刀は、静かに眼を閉じた

幕間 星の一秒 後編（後書き）

今回のお話、如何でしたか？

再編集の為に久々に読み直したのですが、文法が不自然だったりして、直さなければいけない様な箇所が多々あり（まあ、今でもそうなんですけど……）、加えて、改ページでメリハリを付けていた部分を書き直さなければいけなかったりして、びっくりしました。

当時は、早く物語を先に進めたくて焦っていた事もあったんですけど、物が、物語を書くって、本当に難しいですね。

さて、第零話のサブタイは山崎まさよしさんの名曲でしたので、特別解説などはしませんでした。今回のサブタイは少し（と言うか、かなり）マニアックなので、説明をば。

“星の一秒”は、『機甲界ガリアン』と言うロボットアニメのEDテーマです。

歌詞、メロディー共に素晴らしい楽曲ですので、興味を持たれた方は、ぜひ動画サイトなどで探して見て下さい。

尚、前書きでもふれましたが、序章編は今回で完結となり、次回からは別シリーズとして再始動します。

最も、タイトルから『序章』という字が取れるだけですが（笑）。

引き続き、感想、レビューなど、お待ちしておりますので、お気軽にお願いします。

では、次は『真・恋姫十無双異聞〜皇龍剣風譚』本編で、お会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1857q/>

真・恋姫†無双異聞～皇龍剣風譚・序章～

2011年1月19日10時34分発行